# わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 20

医学ジャーナリスト　植田美津江

## 制服の功罪

制服は、理屈抜きでカッコいい。

警察官、ナース、飛行機の搭（とう）乗員、自衛隊員ほかモロモロ。いずれも、その仕事の内容より、制服そのものに相当の魅力がある。美人もそうでない人も、ハンサムもそれほどでもない人も、あまりその種の個人差を感じさせないのが制服である。

はじめてスキー場に行き、インストラクターと仲良くなり、ついデートの約束をしてしまう。ところが、街中のカフェで向かいあったその人はまったく別人のようでがっかり……。よく耳にするエピソードだ。つまり、スキー場でだけ通じる「スキーウエア」が制服だとしたら、それを脱いだとたん「ただの人」に成り下がるというわけ。それほどまでに職業に密接した制服の見かけ上の価値は大きい。

ついでに例をあげれば、弁護士や政治家も同じで、制服とはいえないものの彼らが襟（えり）につける独特のバッチは、すでに制服の持つ威厳や意義を充分に内包している。

あるいは、白衣も制服だとしたら、医師やナースを前にしたとたん緊張が走り、血圧は上昇し、かつ激しい動悸（き）を招くのは必須。白衣が存在するかぎり、「患者中心の医療」は有り得ないと言っても過言ではないだろう。ただし、制服にはそれを身につける側にとってもそれ相応の効果があるのも確か。制服の重みはその職業に対する責任感や自覚を認識させるのに充分な役割を持っているのである。

少子化の時代、程度の差はあれいずこも子供を獲得するのに必死であるが、その証左の一環として「制服」で勝負する傾向もあり、名を聞けば誰もが知っているデザイナーによる制服であることをアピールするケースをしばしば見受ける。可愛くておしゃれなデザインで学生の気を引こうとする学校の思惑は理解できるが、長期に見れば、もちろんそれだけで学生が集中するとは考えにくい。

たかが制服されど制服。効果も色々あれど、それが目くらましとなり、詐欺行為につながることがあるのも周知のとおり。白バイに乗った警察官にあっさり騙（だま）された3億円事件はその典型といえるだろうし、ニセ医者やニセ消防員による被害もあふれるほど発生している。制服が与えるイメージは、加害者の思惑を超える効用を持って多くの人々の意識や固定概念をくすぐり、そして意外な犯罪を生む土壌（じょう）づくりとなっている。

問題は、制服にあるのではない。やはりそれを利用する人間そのものに問われるべき物事の根源があるのだろう。制服のプラス効果を利用し、他人を騙す行為もどうかと思うが、制服をまとった「本物」が犯す犯罪のほうがはるかにたちが悪い。

制服や肩書きを全部剥（は）いだときにさらされる「本性」。それは多分に醜くおぞましいものだろう。制服とは、本性をソフトにオブラートしてくれる貴重な隠れみのでもある。そう思うと、世にある制服を見るたびに身が引き締まる人々の精神の内実は、ほとんどが意味のない「安心感」と裏腹であるといえるのかもしれない。詐欺行為は、騙すほうも騙されるほうも「悪い」のだ。本質を見抜く視点を持ちつつ、制服の美しさやその魅力に酔いしれたいものだとしきりに思う昨今である。

（㈱日本メディカル総研代表取締役）

イラスト・三浦義雄